

# 教育的現實實 (完結)

——現實的主體の實存的自覺——

文學士 森

昭

## (五) 現實的主體の實存的自覺 (教育實踐への轉換)

私は以上三節の長きに互つて、歴史的社會的現實に生き、行動・生活・勞働により成長發達進歩向上する、人間の本質的構造聯關を、發展を中心の觀點とする教育的人間學の見地より解明し、これを學的形態に於いて客觀的に表現せんと努力し來つた。それは飽く迄現實的人間の構造聯關であるが、然し猶勝れて人間の現實の過去の契機の構造聯關であつた。而してこの過去のなる歴史的社會性を媒介しつゝ建設的未來に向つて實踐的に轉換せんとする正にその現在の境位に於いて、遂に最早過去の一方的限定を以てしては超克し難き、人間の生命乃至は歴史的社會的現實の**本**的自己矛盾に撞着するに至つた。この自己矛盾は、それを超克せんとすれば却つて從來の思考態度そのものを根本的に轉換し思考と同時に自己自身が根底より新生する事を要求する不可避的限界境位である事を、私に自覺せしめずには措かぬものであつた。

以來思索の結論は云ふ。即ち、種的共同體の人倫的融即の生活を形成し而も却つてそのために生成發展を阻害する基體的生命が、理性媒介的個人の勞働を通じてかの阻害的閉鎖性を否定的に突破して個的主體的生命に轉化發展

し、以て結合社會的關係を自覺的に形成しつゝその歴史的發展進歩を持續せんとする時、却つてその極限に於いては社會の倫理的絕對性を破綻せしめ人間の全人的實存性を侵害するものとなり、以て歴史的發展進歩の客觀的秩序と主體的動力とを失ふ結果を將來し、こゝに人間の生命乃至歴史的社會的現實は全面的自己矛盾に没落せざるを得ぬであらう。所が人間の現實の自己矛盾の悲痛嚴肅なる體驗こそ正に、私のこの哲學思索を動機付け、私の主體的內面に於いて論考を不斷に指導し、思索の關心と終始求めて止まざるものであつた。我々の生きる現實は實にかゝる自己矛盾に苦惱する嚴肅悲痛の現實である。私は論考の餘りにも長き迂路を経て、遂に私自身の現實的體驗境位に循環復歸するに至つたのである。哲學的自覺なくしては根源的に超克し得ざる體驗的境位の自己矛盾に苦惱しこれを動機として、かの自己矛盾の由來根源を反省的に追跡しこれが超克の道を思索的に追求せんとする哲學的要求と期待とを前提となし、而もこの前提を直接に表明する事を避けて却つて自己の內面に保留しつゝ、私は短からぬ反省思索を続け來つたのであるが、今やこの暗黙の前提が不可避的に顯はに對自化さるゝに至り、自己は再び自己矛盾する體驗境位に直面せざるを得なくなつたのである。明かにそこには一種の循環が行はれて居る。然し自己は循環の途上常に反省思索を深め且つ具體化する以上、それは内容なき空轉でなくして内實ある循環である。先づ少くも自己はこの循環に於いて反省思索を通じて一定の內的變革を遂げた事は否定出來ぬ。自己の自覺は循環を経て深められ且つ具體化されたのである。而も同時にこの循環的反省思索の結論に於いて、その前提たる、私の微小なる自己が驗驗する小規模なる境位の自己矛盾が、遂に巨大なる歴史的社會的現實の相の下に甚だ壮大なる規模に於いて展開さるゝに至つた。即ち微小なる自己が生き自己の懸命なる實踐に於いて變革建設されるでもあらう自己の體驗的境位の自己矛盾そのもので

はなくして、却つて實は多數人間が生き物質の重壓至大にして自己一人の微力を以てしては如何にも仕難き巨大なる現實の自己矛盾を、循環的論考は結論したのである。要するに循環的に合致するかに見える論考の前提と歸結とは、自己の内面に關しても亦體驗的境位の内實に於いても、内包的外延的に少からざる相異を示すと云はざるを得ぬ。この相異は、自己の微小なる體驗を動機として反省思索を初めながら、この自己の體驗境位に徹底的に沈潜し根源的自覺を追求する事をなさずして、却つて一般的現實の論考に眼を轉じ、遂に問題を自己以上の巨大なる規模に擴大せる自己の非實存的、不整合の結果と云ふ外ないであらう。實存的眞理は、自己の狭小なる體驗境位の限定性の中に飽く迄深く沈潜する事を通じてのみ、よく自己自身の主體的根源より開示されるでもあらう。自己の體驗境位の狭小なる限定性に堪へずして、人間一般の現實に視野を如何程擴大すとも、實存的眞理の主體的自覺は絶対に達成され得ぬであらう。直理への道は狭いのである。狭きに即かずして單純に廣きを求めた非實存的、不整合はこゝに徹底的に剔抉されねばならぬ。然し同時に他面に於いて自己は不整合を犯す事によつて實は却つて内面的に少からざる變革を遂げ、以て歸結に於いて開明せる如き巨大なる現實の自己矛盾の中を生き抜く可く覺悟し、こゝに自己の生を決断する事こそ、正に歴史的社會的なる自己に課せらるゝ運命的當爲課題なる所以を、痛切に自覺するに至つたのである。かゝる當爲課題を至上の命法としてこれが實現を懸念の實踐に期する時、初めて自己は眞實具體的實存に新生するのではないか。實存の道は狭くして同時に展望廣きものでなければならぬ。狭き限定性に於ける徹底沈潜によつて實存的自覺は深化され、廣き現實の客觀的媒介を通じて實存の具體性は實現される。現實の廣大を客觀的に媒介する實存的主體の轉換新生によつて不整合なる反省思索の非實存性は絶対否定せられて、却つて具體的實存主體の不可缺なる内容に

媒介轉化されるであらう。然し實はこの非實存的な整合の徹底的なる別決と相關並行する自己内面の變革が、同時に却つて自己の實存的新生を内的行爲的に準備し、實存的轉換の限界境位を明確にするであらう。こゝには一種の相互媒介的事態の聯關がある。それは要するに、不整合なる思索反省が、實は哲學的自覺の自己疎外であり従つて哲學たると共に哲學でないといふ二重性格を持ち、而もかゝる自己疎外的反省思索の媒介によつてのみ、眞に具體的なる哲學的自覺は可能となり、眞實の哲學がこゝに哲學される、といふ事を證示するものではないか。實存の道は矛盾を孕み、哲學は疎外即媒介の運動を通じて具體的なる實存的眞理を實現する。私はかゝる期待と希望とを以て、意に滿たぬ上述三節の論考を否定すると共に肯定し、この否定即肯定の轉換に眞實の哲學思索の機を捉へ、上述の非實存的不整合を同時に止揚媒介せんとする。されば以下の思索は、上來論考の連續的發展たると共にこれとは非連續的に對立し、これに客觀的に依存すると共に同時に主體的に獨立して自己内完結性を持ち、以て眞實の哲學的自覺を達成せんとすると共に、上來論考の絕對否定的完成を目指すものである。上來論考が已に現實的主體の哲學的自覺たる意味を持ち従つて實存的自覺を否定的に媒介するものであるに拘らず、それは猶單に教育的、人間學的自覺に過ぎないといふ事を自覺し、以下の論考に於いて眞に實存的なる哲學的自覺を實現せんとするものなるが故に、特にこの節を「現實的主體の實存的自覺」と名付けたのである。

我々は現實に生きる。全人間に普遍妥當するこの必然的事實は、矛盾相剋する體驗的境位に於いて現實が破綻しての破綻を超克して新たなる現實を建設す可く自己が覺悟し決斷する時、實存的眞理として自己に證示され、絕對的事實として自己に對する至上命法となる。即ち我々は現實に生きねばならぬ。——自己の體驗境位に於いて直接に證示さ

れるこの必然的な事實を思索の動機とし、同時にこれを實存的眞理として哲學的に自覺し、以てこの眞理を至上命法として自己の生を覺悟し、決斷せんとする事を、私の哲學思索の首尾一貫せる内實即目標にしたいと思つたのであつた。少くもかゝる期待と希望とを以て私は論考を初めたのである。然し今や論考は人間的現實の自己矛盾を結論し、自己は最早生く可き現實を失ひ、超克し難き限界境位に直面するに至り、こゝに私は上來の論考を、論考の主體たる自己自身と共に、回顧反省せざるを得なくなつたのである。

回顧反省の結論を簡單に言へば、要するに上來の論考は現實に對する對象的思惟であり自己の主體的思索ではなかつたのでないか。現實の必然的事實を實存的眞理として自覺しようとして思索を開始しつゝ、却つて人間的現實の特に客觀的一般的構造のみの開明に思索は從事したのである。それは正に實存的眞理には不十全なる思索態度と云ふ外ないのでないか。嚮に所謂非實存的不整合の原因もこの不十全性に胚胎したであらう。然し今や實存的眞理に十全なる主體的自覺を回復し、この自覺に終始貫徹さるゝ思索が首尾一貫して更めて遂行されねばならぬ。然し主體的思索は無媒介に遂行する事を許さぬ。媒介は正に現實の本質的構造に由來する不動の要請である。無媒介の主體的思索は實は主觀的思惟であり、現實の實存的眞理の具體的自覺たる事が出來ず、却つて對象的思惟とは反對の抽象に陥る外ない。現實は主體的自己と共に客觀的實在を本質的構造契機となし、自己の主體的媒介を離れて客觀的實在が有り得ぬと同様に、又實在との客觀的媒介の外に主體的自己は生存し得ぬのである。自己の媒介的作用に實現されるであらう主體性そのものゝ徹底的深化自覺と共に、實在と實己との客觀的媒介聯關の徹底的具體化實現が、現實の實存的眞理の實現達成に對する必須不可缺の要件である。勿論之等兩面の主體的及び客觀的自覺は並存的關係にあるのでは

なくして正しく媒介的聯關に於いて遂行さる可きであるが、兩者の媒介的同時遂行は繼起的推論性を本質とする人間の思惟作用に於いては原理的に不可能である。主體的自覺の徹底的深化がその極限に於いて自己否定に陥つて、客觀的媒介を絕對否定的に要求するか、或は對象的自覺の徹底的具體化がその究極に於いて自己矛盾を惹起して、主體的媒介を絕對否定的に要求する、といふ仕方にて於いてのみ兩者の媒介的聯關は思惟されるのではなからうか。かゝる方法のみが人間の思惟に可能なる唯一の方法であると思ふ。然らずして兩者自覺的媒介的同時遂行をなさんとすれば、却つて人間ならぬ神の永遠なるイデーの自己展開といふ如き形態となり、思惟は非實存的觀想に陥つて主體的行爲を喪失する。人間の思惟は疎外を媒介する事なしには眞理を實現し得ざる原本的有限性に纏綿される。上來の論述は無自覺の裡にこの疎外の道を辿つたものであるが、今や却つてそれは、自己と實在との客觀的媒介聯關の具體的自覺を追求しこれを表現せんとしたものととして、新たな自己の自覺に媒介轉化され、以て新たな意義を獲得するであらう。成程それは主體的自己そのものゝ實存的自覺ではないとしても、猶自己の普遍客觀的内實を自覺的に規定する事によつて、現實に於ける自己の可能的なる客觀的、定位を行ふと共に、現實の自己矛盾性を開示する事によつて、可能的、實存としての自己の轉換新生を內的行爲的に準備するものである。それは、今日實存哲學に於いて獨異なる意義を以て使用さるゝ Weltorientierung (世界定位) としよ術語に比へば、 Wirklichkeitsorientierung (現實定位) とも稱す可き體系部門ではないか。こゝに所謂現實定位とは、一面不斷に生理學・心理學・民族學・社會學・歴史學等諸種の科學的事實的現實定位をその都度媒介す可きものであり、従つて當然諸科學の進歩發展に伴いて不斷に更新改變さる可きものなるが故に、この限り究極的完結を達成し得ざる開放性を常に殘すであらう。然し他面それは、常に論考を科

學の研究對象と主體的自己との現實的媒介聯關に於いて遂行するものであり、從つて實は、之等諸科學の研究領域の總體を止揚し之等とは別個の獨自的構造聯關を持つより高次の現實を、本來的對象とするものである。從つて當然諸科學とは別個の立場より獨自の方法に由り主體的原理を以て現實そのものゝ本質構造を解明する。故にそれは單に科學的ならぬ寧ろ勝れて哲學的なる現實定位であり、事實的ならぬ原理的現實的定義である。かゝる本性を持つが故に哲學的現實定位は、科學的事實的現實定位の如く非人稱的なる普遍妥當的客觀性を持ち得ず、却つて定位的に思索する自己に固有なるこの意味で主觀的なる妥當性を持ち得るに止まる。これは一般に哲學思索の全てに纏綿する限界性であるが、然し哲學は主觀的限界性の底を破つて絕對否定的に絕對主觀性を實現せんとし、こゝに科學にはなき實存的主體的眞理を建設せんとする。私は上來の哲學的現實定位に於いては、暫定的であるが私の主體的體驗から自覺せしめられた、根源的、生命と超越的、絕對との、疎外即媒介的なる發展的聯關として、現實の構造を解明しようと試みた。即ち、發展的に相互聯關する種々の生命的行動・共同體的生活・結合社會的勞働を以て自己の歴史的生命的内質を規定し、種々の生命の直接的融一性・共同體に於ける人倫的心性・結合社會に於ける自律的個人性によつて自己の社會的人倫的内質を規定し、兩面の相互的媒介の主體として自己を現實に定位せんとした。

然し未だ十全妥當なる定位を完成するに至らずして遂に現實の自己矛盾に撞着せざるを得なかつたのである。そこに自己を定位す可き現實が全面的に自己矛盾の中に破綻せる以上、自己も亦最早誠實を以て生く可き現實を失ふ。かゝる狀況の中から新たな現實を建設し完全なる現實定位を達成せんとすれば、最早單なる對象の思索を從前通り續行する事を許されぬ。この限界境位は自己の思索態度そのものゝ全面的轉換を要求する。自己は、本來超越的絕對に直

面しつゝ自己の主體的根源より、決斷的實踐的に自己を決定する外なきものであり、従つて實は對象思索により現實の中に客觀的に定位さるゝものではなくして、却つて自ら自己の現實定位を行ふものである。それは最早單なる現實定位ではなくして、その絶對否定に於いて却つて現實定位を完成する決斷であり實踐である。即ち超越的絶對に直面する自己の根源的決斷であり主體的根源より促さるゝ絶對的實踐である。かゝる自己の自己決定は、最早對象的思惟の客觀的規定が能く及ぶものでなく、自己決定を迫る現實の限界境位的自己矛盾の前に、かゝる對象的思惟が道を失ふは寧ろ當然である。

成程現實定位的思惟が對象的であつたと云へ、飽く迄現實に生きる自己の自覺に立脚せんとするものなる限り、客觀的實在を主體的媒介から純粹に抽象して單なる認識對象一般といふ如きものに非現實化する事なく、却つて自己との客觀的媒介聯關に對する自覺は終始把持して來た。然しこの不斷の自覺にもかゝはらず、自己と實在との特に客觀的なる媒介聯關の持つ普遍的構造性は、定位的に思索しつゝある自己が、現實的自己自身より遊離して意識一般を極限とする普遍客觀的認識主觀に轉化する事を、要求し、而も一度斯様に現實的自己と認識主觀的自己とに自己が分裂する時、現實に生きる自己乃至自己が生き現實はそのものとして主體的に自覺されるのでなしに、却つて解明の非主體的對象に非現實化されて、媒介性の稀薄なる客體的存在者乃至客觀的實在に近づくものとなつた。要するに現實定位に於いては、本來現實の實存的眞理を思索を通じて主體的に自覺せんとする自己が、實は却つて現實的自己より疎外されたる意識一般的認識主觀と對象化されたる客觀的自己とに分裂し、同時に現實も非現實的なる實在に對象化されるといふ、全面的矛盾が犯されたのである。かゝる矛盾に於いて遂行されねばならぬ所に現實定位の疎外性が



ある。然し遂にこの現實定位は現實の従つて又自己の現實的自己矛盾といふ境界境位に撞着するに至つた事、前に述べた通りである。今やこの限界境位を轉機として矛盾的自己是絶對轉換して質存的主體に新生し、更にこの轉換新生に即して現實の矛盾相剋を超越し、併せて現實定位の疎外を否定して自己の質存的哲學自覺の否定的媒介に轉化せねばならぬ。

上述より既に明瞭なる如く現實定位的思考に於いて、自己はその三部面に分裂して、質存的統一性を失ふ危機に曝される。即ち、客觀的に對象化され現實に生きると單に考へられるに止まる自己（對象的自己）、定位的思考を行ふ自己即ち以上の論述の主體である所の自己（定位思考的自己）、及び今此處に現實に生きつゝあるこの自己そのもの（現實的自己）の三部面がこれである。現實定位的思考により現實に於いて客觀的に定位される自己は云ふ迄もなく對象的自己であり、定位的に思考する論述主體たる自己がこれに觀念的に對應する。この定位思考的自己は單なる事實的現實定位たる科學の認識主觀ではなくして原理的なる哲學的現實定位の主體なるが故に、他の自己により代行られ能ふ形式的主觀乃至抽象的普遍我ではなく、又全き意味で主體性を缺如せる非人稱的自我一般でもない事勿論であり、従つて直ちに意識一般とは同置する事の出來ぬものであるが、他面今此處に現實に生きるこの自己そのものでない事も否定出來ぬ。然しさればと云つて現實的自己により荷はれざる限り定位思考は事實上遂行され得ぬ事も亦明瞭である。要するに定位思考的自己は、現實的自己がその現實性に即しつゝ、而もその現實性をそのものとして質存的に自覺するのでなしに、純粹客觀的なる意識一般的普遍我に向つて超越せんとする所に成立する自覺形態に於ける自己と云ふ可きものであらう。斯様に定位思考的自己は、その成立狀況に於いては、意識一般と現實的自己との客觀的なる

相互的媒介聯關そのものを内質とする主體なのであるが、自己を單なる對象的自己としてその定位客體とする必然の結果、現實的自己との主體的媒介性をそのものとして質存的に自覺する事が漸次稀薄となり、寧ろ意識一般的認識主觀に客體化され、遂には現實的自己の體驗的基底から遊離して、理念的一般者を原理とする先驗的自律體系に自己内完結せんとする傾向を示す。以上三節の論述と聯關して云へば、現實的自己により體驗的に自覺された超越的絶對も根源的生命も、漸次その質存性を稀薄にされて、多かれ少かれ理念的一般者或は現實解明の客觀的範疇の如きものに、非主體化される傾向を免れなかつた。斯様に定位思索的自己が現實的自己との主體的媒介聯關を離れて、意識一般的自己に近づく時、その必然的結果として、現實的自己の現實的生體驗は、漸次定位的思考より排除され無縁なものととして外々しく取扱はれる様になる。何故なら理念的一般者を原理として定位的に思考する自己の思索にとり、現實的自己の現實的生體驗は單に偶然的經驗的なる特殊にすぎず、その偶然的經驗的特殊をそのものとし、思索的に自覺することが重要な意義を持つとは考へられぬからである。即ち自己の定位的思考が進展するにつれて、現實的自己は却つて益々特殊的偶然的なる直接態に放置され、その特殊なる體驗に即して質存的に反省思索を進め自覺を深めることが等閑に付せられ、その結果現實的自己は、單なる日常的現實の中に自覺的創造進歩なき無反省無思索の空轉を何時までも反復するに止まつて、現實の質存的眞理を思索的に自覺する眞に現實存在的質存主體に自己を深め且つ具體化する事はないであらう。こゝに對象思考にのみ没頭する哲學主體の最大の危険がある。假令如何程現實を説き歴史を口にし社會を論ずとも、現實的自己そのものは却つて非現實的であり歴史的社會的主體性なき抽象的自己に止まるであらう。かゝる哲學主體の非現實への頹落の危機から自己を救ふものは、正しく、我々は現實に生きる、とい

ふかの平凡にして必然なる事實の自覺である。我々は現實に生きて居るのである。否我々は現實を生き抜かねばならぬのである。我々はこの至上命法に肅然として耳を傾け、かの必然の事實を嚴肅なる實存的眞理として自覺せねばならぬ。然る時我々は、哲學思索を動機付け又定位思考に於いて結論された現實の悲痛なる矛盾相剋に直面せざるを得ぬのである。この現實は、最早自己にとつては單なる偶然的特殊ではなく、又定位思考によつて理念的一般者の中に包攝し盡される客觀的現實の一例でもない。それは包攝的定義思考を峻拒し、そのものとして解決される事を自己に要求する絶對の課題であり、自己の全人的決斷實踐を俟たずしては超克されざる峻嚴のアポリヤである。矛盾相剋する現實に誠實以て直面する時、自己は最早日常的世界の中に無媒介の空轉を續ける事は出來ず、意識一般の客觀世界に逃避する術もなく、たゞ全身心學して以て自己決斷し絶對實踐に挺身する外ない。この絶對絶命の境位に於いて、疎外的に分立せる自己は、抽象性に基く自己矛盾の底に没落して、現實的自己の全人的決斷の否定的媒介に轉じ、對象的自己も亦、その對應主觀を失つて無に歸して却つて現實的自己の具體的内容に化し、こゝに自己の全面的轉換は遂行されて、現實を誠實以て生き抜かんとする實存的自己の新生の曙光がほの見えるであらう。

私は哲學的現實定位に於いて、自己を歴史的社會的現實に客觀的に定位せんと思索しつゝ、その定位を未だ完成し終らざる前に、現實そのものが全面的に矛盾相剋する限界境位に撞着し、自己を定位す可き客觀的現實を失ひ、こゝに定位思考を放下して、現實的自己そのものとしての自己自身が全身心學す絶對實踐を以て、この矛盾相剋する現實そのものを生き、これを超克し以て絶對現實を建設す可き不可避的課題に直面するに至つた。現實定位的思考は、意識一般として自律的に自己完結せんとする限り、現實的自己の自己疎外といふ外ないであらうが、現實の矛盾相剋を

思惟的に結論し、以て自己の實存的新生を内的に準備し、新生轉換の限界境位を明確にするものであり、更に新生せる現實的自己の絶對實踐を否定的に媒介するものであつて、この限り現實的自己の積極的内容を形成し得るものである。然し定位的思考を自己の積極内容に否定轉換するためには、これが自律を奪つて現實を生きんとする自己の自律に轉ぜんとする自己の決斷がなければならぬ。所が自律は定位的思考の原本的なる必然的要求であり、一度客觀的思考として開始さるゝや、現實的自己の體驗的基底を離れて自律的運動を續けんとするのは避け難き必然である。定位思考の自律を自己に奪はんとすれば、それが開始さるゝ以前に立ち返り、それを動機付けた自己自身の體驗境位そのものから再出發し、定位思考成立の主體的必然性を反省的に追跡しつゝ、同時にこれと相即して自己の實存的自覺を深める事が要求される。かくしてのみ能く現實定位を自己の積極的内容として主體化する事が出來、併せてこの事を通じて現實的體驗境位の矛盾相剋を眞に具體的に超克し得るのであり、現實の實存的眞理の究極的自覺に到達し得るのではないか。

現實の生が限りなき愉樂に充ちて居る事は確かに否定出來ぬ。現實の愉樂をいやが上にも享受しこゝに生の充實を求めんとする生活態度に快樂主義の人生觀は胚胎するでもあらう。然し現實が様々の苦難に喘ぎ苦惱に満ちて居る事實も否定出來ない。現實は正しく物質の社會的重量を荷ひ、多數個人の主我的意欲により縦横に貫通され、人間の微妙なる心理に限なく振動され、人倫の嚴格なる規律により不可抗的に支配されて居る。現實の構造はまことは複雑微妙であり、對立矛盾し葛藤相剋する様々の契機を孕む。多面なる生の苦難なこゝに根差し深刻なる人生の苦惱なこゝ

に由來する。苦難は物質と連がり生命と結びついて現成し、苦惱は心理に纏綿され人倫と聯關して體驗される。容易に見透し難い現實の微妙なる錯綜複雑なる聯關、或は様々の形もて葛藤し對立相剋する矛盾は、到底無自覺的生の素朴にして幸福なる和樂を許さぬであらう。無自覺の生は錯綜の中に道を失ひ葛藤の裡に壞滅し、素朴なる魂の美しき幸福の餘りにも移ろひ易きを歎ずるであらう。現實の苦難に打ちひしがれ人生の苦惱に呻吟する悲痛の體餘は所詮人間に免れ難き運命でもあらう。然るに生は生きんとする不撓の衝動であり不屈の意志を持つ。苦難の中に生きる道を探め苦惱を堪へて生きる自己をあくまで回復せんとする生の衝動があり意志がある。無自覺の生より自己の自覺的生に轉じ、無盡の反省を媒介しつゝ自覺せる生の主體性を深め、生きんとする實踐にその主體性を實現せんとする。ここに主體的自己の生誕があり、哲學、思索はまさしくこゝに胚胎するであらう。

現實は、物質の輕からぬ重量を荷ふ歴史的、生命の自己形成體である社會を、具體的基體となし、物質に連り生命と結びつく苦難を孕む。我々はこの社會的現實を生き抜く事なくしては現實的生を全うする事を得ぬであらう。物質の生命に對する疎外を否定し生命の成長發達に媒介される本能的行動・技術的活動は、現實的生活遂行の必須不可缺の要件である。生命の身體的強力を鍊へる體育が、更に技術的活動を育成する理學・工學・農學・經濟學等々の科學的教育が要求される所以である。然し一度物質が社會的財貨として主體化され、社會組織の中に歴史化される時、物質の原本的疎外性は、自己の財貨を奪ひ所有を制限せんとする他者の、屢、主我的に社會組織化されし集團的なる、生存意欲に媒介されて、複雑なる形態に於いて自己の生命を脅かし生存を阻害するに至る。かくて如何程技術の修得に懸命の努力を傾注するも、猶社會組織の構造そのものに基き、自我生命に對する不斷の脅威が依然として存続し、最早

個人の微力を以てしては如何にともし難き苦難の運命が個人をさいなみ續ける時、問題は已に個人を超えて社會組織の改變を要求する政治の問題となる。勿論政治的解決が可能なる限り人間社會に對する明るき希望は持ち續けられるであらう。然し人間の力を以てしては超克出來ぬ苦難の根源が人間社會そのものに潜む事が自覺されねばならぬ時、それは正に人間主體の形而上學的問題として哲學思索の有力なる機縁となる。古來多くの人々がこの問題を悲しくも凝視しつゝ哲學的思索に沈潜して行つたであらう。又若し個人の生命力が運命力に弱小であり、社會的物質の疎外を否定超克して生きる生命的主體性さへ確立し得ざる時、人は外的手段にて最早解決し盡されざる自己内面の問題を深く反省す可く促され、自己内反省の徹底の極、個性的人生觀に安住の地を發見せんと努めるであらう。哲學思索への道はこゝにも亦拓かれる。徒らに人世を厭ひ社會への怨恨を哲學に凝縮する不健康の哲學は暫く措く。弱小の生命力を堪へて精神的人格の主體性に強く生きんとする個人の克己的哲學は、深く我々の胸を打ち生の勇氣を鼓舞するのである。

假令物質の疎外を否定超克しても、更に、複雑なる人間心理に限なく滲透され微妙の雰圍氣をもつ人間社會が、我の無自覺的生の平和なる幸福を攪亂する。微妙複雑なる心理が、その根源由來への間を拒むかの如く、不可思議の相を帯びて人間社會を色付け、公共的・私人的交渉の中に錯綜せる様々の雰圍氣を形成する。公共的（私人的）雰圍氣を巧みに察知するに堪に秀でたるものは、現實の複雑なる錯綜に順應しつゝ自己の生を保持貫徹する生活の術を感得し、私人的（公共的）感情を微妙に感受する所謂人情に通じた者は、交渉の調和を保ちつゝ自己の意欲を他に承認せしめこれを實現する社交の術を心得るであらう。確かに現實の生はかゝる廣義の事務的心理的處理により妥協

解決される多様の問題を持つ。かゝる處理の術を修得する事により人はよく社會に調和順應して社會的生存を遂行し得るでもあらう。云ふ迄もなくかゝる意味の處世知乃至常識は、原理的に見て、眞摯なる生命の發展、眞實なる人間の倫理性、實存的自己の誠實とは無縁なのである。斯の如き知慧を誠實の心を以て反省する事なく、單なる處世の術策として人生觀の樞軸として生きる時、人は生の嚴肅にして悲痛なる矛盾葛藤を、單に事務的心理的處理の對象として水平化するのみであり、生の原本的なる悲哀嚴肅は怖れ戰く至純の心を失ひ、悲痛なる矛盾葛藤を超克して生きる誠實の自己を捨て、假令如何程生活の堪能社交の練達人情への習熟を誇らうとも、結局人生の眞實にふれる事なき一介の生活人社交人たるに止まる外ない。かゝる生活人社交人の心から眞實の哲學が生まれる事は絕對にあり得ない。それは高々處世知乃至處世術であり、主體的自己の誠實なる首尾一貫性を有せず根源的實存的統一性を缺く所の、單に特殊狀況順應の術の雜然たる寄せ集めにすぎぬ。生活人社交人の現實的妥當性を持つ限りの處世知が、實存的誠實を以て絕對否定的に主體の根源的統一性により組織されんとする時、初めて眞實なる哲學の思索される地平は拓かれるでもあらう。然しそのためには、處世知の絕對否定と共に、これが所有者たる主體も亦同時に絕對否定せられその人間性が全面的に變革される如き實存的思惟が、內的行爲的に遂行されねばならぬ。自己の全面的覺悟全人的決斷を媒介し又これに媒介される事なき斷片的處世の知慧は、眞實なる哲學思索の名に値しないのである。それはたゞ生の悲哀嚴肅を痛感自覺し現實を誠實以て生き抜かんとする者のみ、よく遂行し能ふでもあらう自己變革的なる內的行爲である。現實的生を誠實に生き抜かんとするものにとつては、人間の生の本質構造に根差す矛盾對立葛藤相剋は、絕對に事務的心理的水平化を拒む悲痛嚴肅の事實であり、たゞ自己の全面的全人的覺悟決斷に發する絕對實踐によつての

み、解決の道が見出されるでもあらう原本的者なのである。たゞ誠實の自己のみよくこの生の悲哀嚴肅をそのものとして曇りなく痛感自覺し、その前にその中に全面的覺悟を覺悟し至人的決斷を決斷し、現實に隨順する絶對實踐に挺身するのであらう。哲學は正しくこの覺悟決斷實踐の否定媒介的反省自覺として主體的に思索されるのである。

眞摯誠實の心を失はざる限り、最早技術的事務的心理的處理によつては如何にともし難き現實の悲痛嚴肅なる苦難に遭遇する不可避の運命を人間は荷ふ、それは體驗的には葛藤相剋する現實の危機であり、論理的には矛盾對立的現實契機の二律背反である。現實の相剋矛盾に直面して自己は人生の激しき悲哀に涙しつゝも、生きんとする生に衝動されて嚴肅なる覺悟を促され決斷を迫られ、決然たる實踐に追ひつめられるであらう。直接無媒介の衝動に身を委ねる外に術知らぬ者は暫く措く。絶對的反省を媒介する絶對實踐に生きんとする限り、自己は主體的必然を以て哲學的反省思索を媒介せんとする止み難き要求を持つてあらう。哲學的現實定位もこの要求に動機付けられて成立するものである。前述の如く現實定位は、この要求の地盤たる自己の體驗境位より離れて、寧ろ自己と客觀的實在との勝れて客觀的なる媒介聯關を解明せんとするものであつた。然し私は今自己の體驗境位そのものを眞に哲學的に自覺せんとする。自覺が哲學的たらん事を求める限り、それは客觀的現實定位を否定的に媒介せねばならぬ。然し媒介の樞軸は飽く迄自己の體驗境位であり、現實定位は體驗境位の個的實存的自覺を否定的に媒介して普遍的客觀性を實現せしめ、以て自覺を單なる個人的物語に墮せしむる事なく、外ならぬ哲學的自覺として表現せんとする。

かゝる原本的態度の下に、哲學的自覺は、先づ現實定位的思考作用を媒介しつゝ、而も同時に自己の主體的體驗に即して、自己がそこに壊滅せんとする矛盾相剋の危機的體驗境位の一般的構造を見定めんとする。然る時この境位が



自我の主觀的意欲と社會の客觀的人倫との矛盾相剋に外ならぬ事を自覺する。勿論哲學に於いては純粹客觀的認識といふ如きものは本來あり得ず、却つて自覺は常に自己の主體性を必然的に媒介し、その限り一定の主觀性の纏綿から端的に脱却し得るものではない。この事は已に哲學的現實定位の學的性格に關する嚮の論述よりして明瞭であらう。矛盾相剋する體驗境位の對立契機として、自我の意欲と社會の人倫とを特に擧揚したのは、正しく體驗する自己の主體性である。他の自己に對しては恐らく之等とは別個の契機を選択する事も可能であらうが、この自己に對しては之等の契機こそ正しく主體的必然性を以て自覺擧揚さる可きものであり、他の諸契機の選擇は單に思想的に理解さるゝに止まる。今は思想的理解ではなくして體驗的自覺が問題なのである。従つてこゝに自我生命といひ社會人倫といふは單なる一般概念として思想的に觀念さるゝものでなくして、正しく自己自身により主體的に生きられる生命そのものであり、又自己が倫理的に生きんとする社會の人倫そのものである。自己の哲學的自覺は、かゝる自己の體驗内容に外ならぬ生命と人倫とを、定位思想的客觀性を媒介して概念的に表現せんと試みたのである。而も矛盾相剋する之等の契機を自己の體驗内容となすが故に、體驗境位と共に自己自身が絶對分裂に苦惱し質存的壞滅に脅威さるゝ事を、今や自己は哲學的に自覺するのである。

然し何故に現實に生きんとする自己は自我生命と社會人倫との激しき矛盾相剋に苦惱せねばならぬのか。誠實なる自己が免れんとして免れ得ざるこの苦惱は然し如何にして超克されるであらうか。問題は單なる思索的構想ではなくして自己の現實的生そのものである。質存的反省は現實を生き抜かんとする自己の全人的主體性を以て徹底的に深められねばならぬ。

生命と人倫との相剋に苦惱する自己の内に閃くのは、苛責する良心を通じて發する理性の光である、自己の生命の内に生命の主我的欲動を否定する普遍的理性があり、社會の人倫は理性の客觀的秩序を具有するが故に自己の服従を要求し得るのである。従つて現實の本質は本來單なる生命でもなく人倫でもなくして正しく理性なのである。現實はその眞實態に於いては常に理性的であり又理性的でなければならぬ。生命も人倫も同じく理性化され本質的理性そのものによつて齊しく規制さるゝ時、兩者の矛盾相剋は理性の客觀的普遍の中に解消され、現實の理性的調和がそこに現成する筈である。然し自己生命が反面に持つ感性的欲動に支配され現實が裏面に藏する感性的質量に纏綿さるゝが故に、現實の理性的調和が破れ自己は生命と人倫との相剋に苦惱せねばならぬのである。さればこの現實相剋の苦惱を克服する唯一の道は、自我の感性的欲動を捨離し、現實を普遍的に規制す可き理性の客觀的法則に服従する理性的自己となり、かゝる自己に證示さるゝ理性秩序を現實的に實現して、理性的人倫をこゝに建設する事である。こゝに理性主義的人生觀が自覺的に建設される。基體的生命の不可避的自己分裂に由來する理性の否定的成立が、人間生命に必然的なる以上、理性主義が人間の生命の中に本質的根柢を持つ事は否定出來ぬ。然しさればこゝに理性主義の限界性が胚胎する事も見遁す事が出來ぬ。理性は斯様に生命的基體の否定に於いて自覺されるのであり、従つて當然現實の基體性より遊離して純粹容觀的體系として自律的に完結せんとする傾向を持つ。故にこの自同的理性を軸樞とする人生觀も亦、生命的基體を生そのものを眞に具體的に生きるといふよりは、寧ろ現實の一面的契機たる理性秩序のみを一方的に擧揚し、生命的基體は否定さる可き消滅契機としてこれを觀するに止まる。即ちそれは相剋矛盾する現實の分裂に深く徹底して内在即超越的にこれを超克する具體的態度ではなくして、却つて現實の内在的基體を無

視して超越的理想により一方的に現實を規定せんとする抽象を犯す。然し我々はかゝる抽象に陥らざらんがためにこそ、短からぬ現實定位を遂行し人間の生命的基體性を自覺擧揚せんと努め來つたのである。理性主義的人生觀への現實遊離は、現實を誠實且つ具體的に生き抜かんとする當初の決意を裏切るといふ外ない。寧ろ私は理性主義の破綻を自覺したるが故にこそ、現實を生きんとする哲學的思索を始めざるを得なかつたのである。

歴史的社會的現實そのものゝ中に全的に自己を没入し、至人學して以て現實を具體的に生き抜かんとする誠實の覺悟を固める時、現實遊離の傾向を原理的に免れぬ理性一元の立場を以てしては如何にともする事の出來ぬ非理性的者がこの現實を構成し、かゝる非理性的者なくしては現實が具體的に存立し得ざる事を、我々は痛感自覺せざるを得ぬ。現實は理性の光を以てしては到底透視し得ざる暗黒を深く藏して居る。現實の理性的秩序はかゝる暗黒によつて刻々に否定され、而もこの否定を通じてのみよく現實の生々潑刺たる運動は遂行されるかにさへ見える。理性的秩序が永遠に現實を支配し、この支配の下にのみ現實の具體的現實性が活發に發揮さるゝなら、矛盾相剋といふ現實の不幸悲哀は本來あり得ない筈である。然し現實の矛盾相剋に苦惱する我々は、到底現實の非理性的者に眼を背ける事は出來ないのであり、これを無視しては絶対に苦惱の徹底的超克も不可能なるを痛感せざるを得ぬ。現實の従つて又自己の物質的・身體的・意識的基體が、非理性的者により免れ難く纏綿されて居る事は云ふ迄もない。然し本來非理性的者に否定的に對立するかに見える理性的自己の成立そのものが、實は非理性的なる種的生命の運動に基底付けられ種的生命の自己分裂に機縁付けられるものであり、従つて生命的基體との否定的媒介に於いてのみ理性的自己は現實に成立し得るものである。換言すれば現實的自己は生命的基體から遊離して自己内完結せんとする單なる理性的自己

ではなくして、却つて逆に種的生命基體との否定的媒介性を自覺しこれを自己の基體的否定契機として主體化する所の精神的自己である。現實に自覺的に生きる自己は多少とも斯の如き精神性を有するものであり、理性は、かゝる精神的なる自己の主體的構造契機として生命の基體の否定に於いて、その本質を發揮する否定的作用そのものに外ならぬ。更に又社會的人倫の理性的秩序も、自體的に成立し永遠の妥當性を有するものではなく、實は常に種社會の非理性的なる生活形式を基體とするものであり、共同體の生活に於いてこの生活形式との融即一體の聯關に生きる種體が、生活形式の理性的否定を媒介して精神的自己の自覺に轉換向上する事と相關して、その基體たる生活形式の否定に於いてこの理性的秩序も現實に實現されるのである。斯の如く生活形式の否定に於いて實現される理性的秩序を社會的人倫は否定的に媒介するものであり、従つてそれは常に種共同體の基體との否定的媒介聯關に於いてのみ現實に存立するものである。この限り社會的人倫は、種共同體の限界を端的に超えて永遠に普遍妥當する理性秩序ではなくして、却つて共同體的生活形式が理性を媒介して否定即肯定される所に規成する所の客觀精神である。斯様に現實に妥當する社會的人倫は常に何等かの客觀精神性を實現するものであつて、理性秩序は、かゝる客觀精神的人倫の普遍的構造契機として、理性的個人による種的生活形式の否定乃至批判に於いて、自覺される一般の法則性に外ならぬ。要するに現實を主體的に生きる自己も、現實に客觀的に妥當する人倫も、現實的たる限り、種生命を基體的構造契機となし理性的普遍を否定的に實現せる精神的構造聯關を、夫々多かれ少かれ實現するものであり、單なる生命的者でもなく亦單なる理性的者でもないのである。

然し自己も人倫も共に、單なる生命者でなく理性者でなくして、基體即主體的なる精神的現實存在者なるが故に、

かゝる精神的媒介性を破壊する疎外により不可避免的に纏綿されざるを得ないのである。直接的生命を揚棄し抽象的理性を止揚するが故に、却つてこれ等にはなき倫理的疎外に脅威さるゝ危機性を免れない。こゝに人間の生の深き自己矛盾があるのではないか。彌高き精神的向上を目指すものはそれだけ深き倫理的疎外に堪えこれを否定し主體化する強き精神力を必要とするのである。精神的向上の道は坦々たる平面ではない。それは倫理的疎外に脅威さるゝ苦難の峻嶮である。而も倫理的疎外は正しく精神の基體契機たる生命そのものに起源する。基體的生命は、自己と人倫とが實現す可き精神性を執拗に疎外し、之等を疎外的なる精神主體乃至客觀精神に頽落せしめんとする反精神性を持つ。生命的基體を否定的に媒介するが故にこそ、よく精神は、具體的精神たり得るのであるが、同時に却つてそのために疎外的精神に轉落する危機を免れぬのである。精神のかゝる不可避的疎外性こそ、現實に於ける自己と人倫との不幸なる矛盾相剋の原本的根源である。精神が常に純粹の精神であり疎外の可能を全く有せぬとすれば、精神主體たる自己と客觀精神たる人倫との矛盾相剋は恐らく現實に惹起さるゝ事はあり得ぬであらう。併し現實にはかゝる純粹精神は實存せぬ。現實の精神は常に疎外的であり、疎外的なるが故に却つて現實の精神たり得るのである。人間の精神的生は運命的に相克矛盾を免れぬのである。現實に生きんとする自己は人間の精神的生のかゝる悲痛の運命を痛感せざるを得ないのである。

抑、自己が眞實の精神主體たるためには、單に種的生命を自己の基體契機とするに止まらず、更に之れを理性的主體性を以て否定即肯定して自己に主體化するのなければならぬ。即ち種的生命の持つ直接的種性を理性的普遍により否定し、同時に種即類的なる精神的主體性の内容に絶對否定的に媒介轉化せねばならぬ。若しこの時理性的否定が

不徹底であり生命の直接的種性がそのまま猶殘留する限り、それだけ精神的主体性は稀薄となり、自己は寧ろ生命的自己に近きものとなる。然しこの場合の生命的自己は最早融即的共同體の中に於いてこゝに支配する人倫との一體融一を生きる種的自己そのものではなくして、實は共同體の人倫より分立して理性的個人性を持つものでありながら、而もよく眞實の精神主體たり得ざるものなるが故に、それは人倫より疎外せられたる主我的自己と云ふ可きものである。精神的自己は理性的自覺を有するが故にこそ、却つてこれを生命の主我的發動のために利用し得るのである。精神的自己は、眞實なる精神とは徹底的に反立する疎外的自己たり得る可能性を、自己の中に持つのである。それは即ち惡への自由である。斯様に疎外的自己は精神的自己に於いてのみあり得るが故に、兩者はその構造契機に關しては同様であらうが、疎外的自己の生命的基體は、共同體の融即的生活に於いて形成される人倫的生命ではなくして、實はかゝる共同體的生命から離れて主我的に發動する所の疎外的生命である。即ちそれは種的生命の融即性を破壊する自我が、主我的觀點より自己化する主我的生命であり、最早人倫とは何等の聯關を有せざる欲動であり我欲に外ならず、同時に又生命の眞實なる歴史的發展進歩とは無縁なる生命の浪費である。人間の精神的生は、まことに隱微の中に自己疎外するものであり、我々は不知不識の中に疎外的精神主體に轉落し、疎外的生命を自己の絶對意志と盲想し、他者生命の發展進歩を阻害しても或は人倫の秩序を破壊しても、猶これを貫徹し實現せんとする事も少くない。然しこれは云ふ迄もなく自己の惡であり罪でさへある。如何なる苦痛困難を忍んでも自己は斷乎としてこの主我的欲動を超克し捨離せねばならぬ。この自我否定の苦痛困難を雄々しく堪えずして、この欲動を貫き他者を傷つけ人倫を破る事は絶對に許す事が出来ぬ。我々はかゝる主我的欲動を人倫との對立項として措定する倫理的寛容を持つ事が出

來ぬ。論理は誠實なる倫理的意志に貫かれねばならぬ。

次に、人倫が眞實なる客觀精神たるためには、單に共同體的生活形式を基體契機とするのみでなく、自立的なる理性的個人をその中に生かし、生活形式の種の相對性が個人の理性的自覺により批判され或は否定されて、個人の共同體的交渉關係の秩序を維持すると共に各個人の自律的實踐を許し、生命の歴史的發展進歩を可能ならしめるものでなければならぬ。若し理性的個人の自覺を具體的に媒介せず生活形式の直接的種性を無媒介に残存せしめる限り、人倫の客觀精神性はそれだけ稀薄となり寧ろ種的生活形式に近きものとなるであらう。然しこの場合に於ける生活形式は、種的共同體のそれの如く人倫的生命と具體的に融即し共同體の不可缺的建設契機たるのではなくして、已にそこから自立的個人は分立してそれと否定的に對立するものとなつて居るが故に、それは最早個人生命とは無縁であり、單なる過去の習俗として自己自身を維持せんとする非歴史的人倫の形骸にすぎぬ。而もそれは兎も角も客觀精神的構造を持ち、一應理性的個人の自覺と否定的に媒介さるゝものなるため、却つて疎外的精神主體の自己是認のために利用さるる可能性を持つ。即ち人間の生の歴史的發展進歩に積極的に參與せんとする熱意を有せず、過去の習俗を墨守する事に何等か積極的自己満足の様きものを感じる疎外的個人が、この習俗に精神的個人たるの名目を付與して、自己の生活態度の倫理的權威を主張せんとする場合が少くないのである。かゝる人倫は最早眞實なる種的生命とは望しき聯關を缺くものであり、非歴史的人倫の主我的生活態度の辯護手段にすぎず、最早人倫にして人倫でなく疎外的個人に外ならない。斯の如く人倫が種的生命基體より疎外され、從つてその中に何等の生命發展の契機を藏せざる單なる保守的習俗なる場合、或は又それへの服従が却つて生命の眞實なる歴史的發展進歩を阻害する場合、この人倫を墨

守して自己を辯護せんとするのは、人間的生の歴史性を無視したる抽象観であり、更には生命の眞實なる發展を阻害せんとする惡といふ外ない。自己は如何なる社會の壓迫に抗しても斷乎としてこれを破却變革する困難苦闘を回避してはならぬ。この壓迫と苦闘する勇氣を缺き、困難を忍ぶ氣力を有せず、却つてこの疎外的人倫に迷信的權威を付與してその存立を認め、これを利用して主我的意欲を貫かんとする時、或はその壓迫に堪えずして怨恨的人世觀に逃避する時、こゝに人は積極的乃至消極的意味の人倫的惡を犯す事になるであらう。然しかゝる人倫は人倫にして最早眞實の人倫ではない。これをしも猶人倫として自己との對立項として措定する事は論理の非人倫化である。論理は飽く迄眞實なる人倫の論理でなければならぬ。

右に反省考察せる如き疎外的なる精神主體・客觀精神としての自己・人倫は、眞實なる精神主體・客觀精神に徹底的に反立する自己・人倫の最も極端なる疎外態であり、單にその構造契機が精神の契機を分取するのみであつてその本質に於いては最早全く精神性を喪失せるものである。それは精神の全的疎外態に外ならぬ。然しかゝる極端なる疎外形態に於ける自己乃至人倫が現實に存在する事は寧ろ極めて稀であつて、現實の自己乃至人倫は多くの場合、精神の眞實態と疎外態との中間形態として存立するのではないか。現實は惡魔的現實でもなく天使的現實でもなく、飽く迄中間的なる人間の現實なのである。自己の生命的欲求・意志が種的生命と何等の好ましき聯關を有せざる事は寧ろ稀であり、従つてその實現は常に何等かの意味に於いて人倫の建設に參與するのであり、又その貫徹は同時に歴史的生命の發展進歩に外ならぬのである。而して又人倫が種的生命この望ましき聯關を全然缺如する事は極めて少く、寧ろそれは、屢々、歴史的生命の發展進歩の過程に於ける人間關係の必然的秩序として形成されたる意味を、多少



とも保有するのであり、或は又人間性の内面に何等かの動かし難き根源を持つものなのである。斯の如く自己も人倫も共に種的生命との本質的聯關を持ちこれを基體として何等かの精神性を實現する場合、而もそれにも拘らず兩者が猶矛盾相剋せざるを得ぬ時、正しくこゝに我々は容易に二者擇一以て一方を遂行貫徹し得ざる倫理的苦惱に直面せざるを得ないのである。相剋矛盾が二者擇を一許す限り事態の超克は容易であり、倫理的苦惱に陥る事はなく、従つて又哲學的思想を主體的必然を以て要求する事はないであらう。然し現實は屢、二者擇一を許さざる相剋矛盾を以て而も自我の決斷實踐を迫るのである。人倫と相剋するの故を以て自己の生命を貫徹せんとする意志を單純に放棄する時、却つて生命的倫理的現實は歴史的發展進歩の生命的動力を失ひ、従つて同時に自己生命により個的に表現される種的生命との主體的聯關より疎外されて、個人の實踐を通じて變革建設される事なき過去のなる客體的形骸に固形化される外なくなる。自己は斯の如き歸結のために自己生命の要求を犠牲に供するを忍ぶ事が出来ぬ。自己の不當なる卑弱感の故に正しき自己主張の意志をも簡單に放棄し、客體化されるであらう人倫に屈從する事こそ、正しく奴隸的、道徳であり、かゝる自己否定に何等かの積極的倫理性の充實を感じようとする事は倫理的錯倒に外ならぬであらう。正當なる自己主張を媒介せざる單純の屈從は、人倫に對する眞實なる尊敬ではない。個的自己の自律なくして眞實の人倫建設は到底望まれぬのである。

然しさればと言つて、一方的に自己の生命的欲求・意志を無制約的に主張貫徹する事が許されるであらうか。今の場合自己生命は種的生命基體と望ましき聯關を保つものなるが故に、それは生命の歴史的發展進歩の個的精神的動力であり、同時に種的生命に根源する客觀精神的人倫の個的實現たるの意味を持つ。即ち自己は種的生命を自己に内在

化しこれを主體化せる精神的主體である。然しその精神性を充實し眞實のそれに迄高めんとすれば、それだけ却つて種的生命基體に對し理性的否定を加へ、その直接的種性を揚棄せねばならぬ。眞實の精神的人倫は、種的主體に否定對立する自立個人によつてのみ實現され、種的主體は、これに對立する個人の理性否定を俟つて眞實の精神に主體化されるものである。こゝに基體の精神的主體化の自己矛盾性があり、従つて又主體化する精神的個人の自己否定性がある。加之、基體を主體化して精神的に完成する個人は、原理上多數並存する。種的生命は、多數の個體を生み、多數の個體によつて特殊化されるからである。のみならず之等多數の個體は特殊化せる種的主體を各々自己の基體に持ち、夫々特殊なる生命的存立をなし生命的要求を懐く。而して各個人がその生命的存立を主體的に自覺し、倫理的生活實踐を遂行する精神的主體たらんとする時、夫々の特殊的主體を包攝す可き主體的普遍原理をその生活實踐の原理として樹立せんとする。こゝにその生存基體の特殊性に應ずる特殊即普遍的なる様々の生活態度乃至人生觀が自覺建設されるであらう。所が之等多様の生活原理はそれが主體的精神的に自覺されればそれだけ、單なる意識内在的觀念であり得ず、却つて疎外的物質をその特殊性に應じて否定的に媒介せんとする個體の特殊生命と必然的に聯繫し、社會的生活環境に於いて行動する個體の特殊意欲に貫かれ、従つて當然高度の特殊の個性を有するものとなる。かくて多數の精神的個人が自ら實現して居るであらう共同の人倫的精神は、個人の右の如き特殊の個性が自覺されると同時に、その客觀的規範性を云はゞ上に破られて、特殊の意欲に制約される多數の主觀的生活原理に分裂すると同時に、物質媒介的生命の特殊性によつて基體的に制約されて、云はゞその底部に特殊なる自然生命性(素質)を對自化するに至る。斯様に上に自覺される主觀的生活原理と下に對自化される特殊の自然生命性を精神的に媒介するのが、

自己の廣義なる個性的性格である。斯の如き個性的性格の自覺的分立と共に、人倫的精神は最早共同的規範性を維持する事が出来ず、却つて自然生命的欲求を精神的自覺を以て生活環境に於いて實現せんとする諸個人の個性的性格主張の對立によつて、人倫の融即的共同性は破綻し人倫の分裂態が現出する可能性が高まつて來ざるを得ない。我々が生きる現實は斯の如き意味に於ける人倫の分裂の高度なる可能性を孕むのである。我々は自己の生命的欲求意志を一方的無制約的に主張貫徹する事を許されるであらうか。この問は正に斯の如き現實に生きその分裂の危機性を痛感する自己により發せられる問である。今やこの問は、誠實以て現實を生き抜かんとする自己自身により答へられねばならぬ。

自己は云ふ迄もなく一定の問を掲げこれを答へんとして實踐する合理的意識主體ではない。寧ろ激しき生命意識に衝動されて行動する精神主體である。自己に於いては意識的なる問や答が先づあるのではなく、初めにあるのは多少とも精神化された衝動に基く主體的行動である。全く反省の媒介なき直接衝動的行動はあり得ぬのであるが、猶様々の反省的媒介を貫く生命意欲が自己を激しく衝動し、媒介的反省を高次の直接態に生命化する精神的意欲に従つて自己は先づ行動する。而してかゝる行動を現實に自己が遂行する事を通じて、右の問は常に何等の仕方で幾度か繰返し答へられて居るのであり、その解答を俟つて新たな實踐に挺身せんとする自己の回顧的反省として、右の問は常に新たに自覺されるのである。要するにこの問が發せられる時已に問は體驗的に答へられて居るのであるが、この答を基礎として高次の實踐を遂行せんとする自己によつて、こゝに哲學的なる問として新たに自覺され哲學的答を要求されるのである。要するに悲痛嚴肅なる體驗の代償なくしては、この問は自覺される事もなく亦答へられる事もないで

あらう。それは單なる知識上の事柄ではなく、實存的體驗そのものなのである。従つてそれは單に回顧的反省に於いて問ひ且つ答へられるのではない。却つて激しい生命意欲に衝動されて行動する自己は、常にその生命的欲求意欲を一方的無制約的に主張貫徹せんとするものなるが故に、實は常に右の如き問を提げて、否自らかゝる問そのものとなつて、現實に行動するのであり、今後幾度か身を以てこの問を現實に問ひかけるであらう。然しこの問を現實に問ふ行動を初めの低次なる直接行動に止めざらんがためには、我々はこの問を回顧的に自覺し、過去の體驗を媒介しつゝ、反復的に哲學的解答をなさねばならぬのである。

自己生命が種的生命と望ましき聯關を持つ限り、これが主張貫徹は常に何等かの意味に於いて常に、生命の歴史的發展進歩を推進し、又その中に特定の人倫性を實現して居るであらう事は、疑ふ餘地がない。自己は假令哲學的反省自覺を有せずとも、教養の程度個性の如何環境の狀況に應じて、自己生命のかゝる意味に於ける歴史性と人倫性とを確信し、激しき生命意欲に衝動されつゝ、自己生命の主張貫徹を希求し、眞實なる精神を自己のはたらきを以て具體化し實現せんとして行動するであらう。自己生命の歴史性人倫性に對するかゝる確信、即ちこの意味に於いて自己は善なりとの強固なる信念は、單なる生命意欲の熾烈なる直接衝動に加ふるに、精神的確信道德的信念から湧發する自覺的主體性の強さを以て、自己生命を貫徹實現せずんば止まざる精神的義務感をさへ高める。生命意欲の發動に衝動されつゝ而も精神的自覺を以て自己を主張する事に、自己の倫理的生存感を全身的に感得し、これこそ眞實なる精神の實現に外ならずと自信するであらう。成程自覺が精神的たる限り、常に何等かの程度歴史的現實社會的人倫への批判乃至態度決定を媒介し、従つて自己の生命的意欲もこれによつて一定の限定を受け、之等との媒介聯關に於いて主

張されるでもあらう。然し自己の主觀的確信の強さ生命的意欲の激しさは、この精神的媒介を却つて自己生命を中心とする主觀的恣意的媒介たらしめずには措かぬ。兎も角も歴史的人倫的現實に對する批判的態度決定を媒介したといふ主觀的確信性は、自己生命の貫徹實現に對する精神的確信を高め、眞實なる精神實現の道はこの外になきを自信するに到る。かくて高められたる確信自信は、遂に自己生命の伸張發揮を阻害する一切の歴史的人倫的現實は超克否定せる可きものであり、自己の意欲を制限否定する全ての他者生命は壓伏征服せる可きものといふ信念を深め、自己生命を一方的に主張し無制約的に貫徹せざる止まざる行動の激しさに激發するであらう。それは己に、主觀的恣意的たる意味に於いて、多かれ少かれ盲目的なる行動であり更には寧ろ驕進といふ可きものである。そこには媒介的反省の一切を直接化する生命の勢があり、行動は勢のまゝに激しき驕進を続ける。而して驕進する勢の趣く所、規制せんとする一切の歴史的人倫的現實、阻害せんとする様々の他者生命に對し、敢然として鬪争を挑み、これが超克征服に生命の緊張を積極的生甲斐を實感して、最早自己生命への冷靜なる反省を喪つて、規制の超克阻害の征服に奔命しつゝ、自己生命は行え知らぬ驕進を続け、遂に實現せる可き眞實なる精神の目標を見失ふ。而もこの鬪争に勝利せんがため自己を強力に武裝せんとする無意識の要求は、自然生命の全的動員を必要とし、動員さるゝ自然生命の種性を包攝す可き主體的原理を新たにし、以て自己の主觀的確信性を主體的精神性によつて妥當化し、自然生命に衝動さるゝ自我意欲の精神的名目を擧揚せんとする。靜觀すれば自己は對外的鬪争の進展と共に、内部的變質を遂げつゝあるにかかはらず、自己はこの事實を自覺する反省の餘裕をもたず、當初の主觀的確信性の恣意的信念に固執して驕進の行動を続け行くのみである。然るに無自覺の裡に内的變質を遂げ行動目標をすりかへたる驕進の極まる所、遂に具體的

なる歴史的人倫的現實の建設から自己は逸脱し眞實なる精神より疎外されて、却つて自我絶對視の我執に轉落する事必然である。我執する盲目の自我は最早眞實の自己でなく、自己疎外的自我にして一切惡の主體である。而も自我の疎外極まれば自我の惡を自覺す可き絶對媒介の道は斷え、眞實なる精神の外に自己は無底なる惡へ沈淪し行く。疎外的鬭争を飽く迄持續するに堪える執拗なる惡魔的生命主體はこゝに措く。遂に熾烈なる鬭争に刀折れ矢盡きて驀進の精力遂に盡き果て、しばし停滯して自己反省の餘裕を取り戻したる自己は、今や眞實の精神より疎外され無底の上のたうちまはる己の絶對孤獨に肅然として醒め、罪惡の奈落に没落を深め行く恐ろしき自らの姿を愕然として見出し、眞實なる精神と自己の間に口開く絶對の斷絶に戰慄するであらう。然るに既に眞實なる精神に復歸す可き媒介の方途は斷え、眞實の自己を恢復す可き自らの精根は盡きて、たゞ無底なる没底の底ふかく自己を吞了せんとする深淵のみが冷酷に口開くのみである。動けばいよ／＼没落は深まり疎外は益々高まつて行く。寂寥不安恐怖、我れと我が身に堪へずして頭を擧げて肅然と祈る。自己の一切をころして絶對の媒介に隨順せんとする嚴肅の瞬間、死して生まれんとする絶對絶命の境、必ずしも過去の非の一々を想ひ悔ゆるに非ず、最早現實の自己そのものを生きるに堪へずして全身を投げ出だし絶對に委ね切らんとする悲痛の切願である。絶對自己否定以て新たな自己に生れんとのみ難き悲願の衝動である。この抑へ難き衝動に卒直に己を委ねよ。猶且つ過去の勢に執し我意を守るは我慢の罪であり、自己の疎外いよ／＼深まつて施す術なきに至るであらう。眞執誠實の心を以て決然過去の絆を斷ちて絶對の媒介に隨順せよ、新生はそこに遂げられるであらう。現實は自己の絶對隨順的決斷を媒介して轉換されるであらう。轉換せる現實は新生の自己を攝取してこれを生かし、新生の自己は現實に絶對の現成をみる。自我主張の盲目に遮られたる

現實の絕對性が嚴肅の相の下新たに見出されるであらう。絕對否定的自己の死即生を通じて絕對は現實に現成し、自己は絕對自己否定を通じて絕對現實をそこにみるのである。現實と自己との相互的絕對否定の極、自己即現實の絕對現實が建設即生成したのである。眞實の精神はこゝに自己即人倫の絕對精神として現成する。而して鬭争的自我主張の極まる絕對自己否定的絕對隨順の現實的證は、絕對現實への建設的隨順でなければならぬ。この絕對現實の隨順的建設こそ正に絕對隨順的に新生せる自己の唯一、絕對の生に外ならぬのである。

無制約なる鬭争的自己主張の極、絕對絶命の自己疎外の中から、絕對媒介的に自己は、絕對轉換して、絕對現實の隨順的建設に獻身せんとする。それは没落の無底より新生せる自己の悲痛なる信であり希望である。然し假令自己が絕對的轉換と信するも、それは單なる主觀的轉換に對する主觀的確實性にすぎず、従つて現實の絕對性といふも單に主觀的自己のみる主觀的絕對性に外ならぬのではないか。即ち歴史的現實は何等の具體的發展進歩を遂行せず、社會的人倫はその人倫性を絕對人倫にまで具體化する事なく、結局歴史的的人倫的現實は正に否定超克さる可き齋態に依然停滯して、絕對現實に轉換して居ないのではなからうか。自己新生の絕對轉換と云ふも要するに相對的現實に於ける獨相模であり主觀的妄想に終るのではないか。要するに一切は深刻なる喜劇に終始するのではあるまいか。これは、絕對轉換に於いて現實の絕對性を信じ、現實隨順的建設實踐にこの信を證せんと希望する、新生の自己を襲ふ疑念であり不安である。現實は物質に纏綿される非人倫的生命を基體とし、個性ある多數の自立的個人により構成される客觀的組織であり、従つて相互に聯關する二様の側面に於いて、主觀的自己を超越する客體性を以て獨立自律的に運動する實體即主體である。現實は、自己一人の轉換建設を以て轉換變革さるゝには、餘りに重き客體性を持つ、現實の

轉換變革は、客體的實體を自らの立場に於いて個性的性格を以て主體化する多數個人の相互的轉換を、更には組織的協同を、必要とするのではないか。然し各個人は、各自生存の必要に促され個性的性格に應じて客體的實體を通じて、寧ろ主觀的なる現實の建設者として行動するのみである。成程單なる物質的基體に關する限り、その主體化は制作技術の一般的發展進步更には各個人の生活力の増進と共に、一步一步その具體性を高めるであらう。斯の如き物と人との關係交渉を通じての現實建設には、何等の倫理的實存的障礙困難は惹起されぬ事云ふ迄もない。然し人間の現實は、物と人との關係と人と人との關係との相互否定的媒介態であり、物と人との關係が人と人との關係として現實的に還相する時、各個人の自然生命の特殊性更にはこれを主體化する生活原理の個性的性格的差別が、對人關係に於いて對自化され來つて、こゝに様々の形態に於ける人間的對立葛藤が激成され、對物關係も亦この狀況に制約されて種々の障礙困難を生ずるに到る。嚮に自己生命と人倫との矛盾相剋と云つたのも、右の如き人間的現實に於ける對物・對人の兩關係の對目的分離と否定的媒介關係を考察に入れる時、實は客體的實體を個性的に夫々主體化せる多數他者の生命意欲の自覺的主我的主張と、自己の生命意欲の主張との對立相剋抗爭に、外ならないのである。斯の如き對物關係と媒介さるゝ對人關係の對立抗爭に、現實の歴史性と人倫性との相互聯關する兩面に於ける様々の矛盾相剋が由來するのである。されば現實の絶對否定的轉換更に絶對現實の隨順的建設は、自己の現實隨順的絶對轉換と同時に他者の同様なる絶對轉換なくしては、その具體的遂行を到底望む可くもないのである。自己の絶對轉換とは無縁に多數の他者が舊態依然として相對的自我主張に固執する限り、絶對現實の隨順的建設は眞に具體的たり得ないであらう。こゝに現實建設の測り難き困難がある。相對的自我主張に固執する他者の意欲に屈服して爲す所なきは結局自己の奴



隷化であり、それは絶對現實建設の悲願を自ら放棄する事に外ならない。要するに自己は主觀的現實に於いて觀念的空轉を繰返すにすぎぬ事となる。隨順的建設は、分に應じ位に由つて、他者の絶對轉換をも希望し要求するのではないか。

他者の相對的自我主張を容認し傍觀して爲す所なきは寂靜主義の惡であり、これに自己を屈從せしめて満足するは道德的奴隸主義であり、かゝる不作爲の態度決定に積極的生存感を實感するは世界觀的錯倒に外ならぬ。我々は絶對現實建設の誠實なる意志を毅然として堅持し、奴隸的錯倒への一切傾向を斷乎として捨離せねばならぬ。隨順的建設は誠實不拔の確固たる意志を要求する。然るに他者も亦自然的意志を持ち自律的人格を持つ他者の人格的意志を阻害する限り、正しき建設意志の遂行も遂には眞實の精神より疎外せらるゝであらう。他者の自然生命的特殊性、これを主體化する精神的生括原理の個性的性格、この主體化の中に働く眞實なる人格の自律性は、飽く迄具體的に認識し深くこれを尊敬せねばならぬ。これは正しく絶對的人倫建設の必須要件であり、又歴史的生命の個性的發展進歩に對する尊重の必要條件に外ならぬ。この自覺は絶對的自己疎外の悲痛なる體驗を以て自己が購ひ得たる嚴肅の自覺である。他者人格の尊敬は今や自己に對する至上命法である。然し他者人格の自律性を尊敬する事と他者の相對的自我主張を容認する事とは決して同一事ではない。他者の現實隨順的建設への絶對轉換に對する誠實の希望は必ずしも他者の人格的自律性に對する尊敬と矛盾するものでなく、却つて兩者は深き内面に於いて主體的聯關を持つのではないか。然し客觀的外觀的には矛盾するかに見える兩者の内面的聯關が主體的に捉へられるためには、矛盾の解消す可き處があり位が要求されるであらう。その處を得ず位を具へずして行はんとすれば他者の人倫を害し人格を亂す事必至

である。かゝる内面的主體的聯關の捉へられる處と位とが與へられる具體的況位が、即ち一般に反復持續的なる全人的生活交渉の行はれる共同體的人倫ではなからうか。勿論こゝに所謂共同體は、人類の遙かなる過去に實在せるかの如く想定される純粹種なる原始的共同體ではなくして、この現實に於いて現實的諸個人により主體的に生きられる共同體である。従つて當然それは純粹種ではなくして已に個人の分立を許し多少とも結合社會化せる共同體であるが、我々は類型的に比較的共同體的性格の濃厚な特定の社會形態を現實の中に區別する事が出来る。現實に於いては血と性とを基體とする家族が最も濃く共同體であるが、その外に共同精神といふ可きものを基體とする友人關係、更に同志的協同等も共同體の一類型と考へる事が出来る、その他の社會形態も家族性・友人性・同志性を實現する限り共同體の類型に多かれ少かれ與る事が出来る。一般に主體的に生きられる共同體に於いては個人相互の融即一體の關係が自ら形成され、この一體の融即の中に全人的愛が反復持續的に生きられるのである。全人的一體融即が即ち全人的愛が、共同體の主體的軸心であり、家族性も友人性も同志性も全てこの愛をその樞軸契機とする。愛による全人的融即が具體的である程、その人間關係はより共同體なのである。凡そ全人的愛に於いては自己は即他者であり他者は即自己である。全人的愛のある所自己は他者の精神的人格的延長であり他者は又自己の延長である。愛は相互獨立の自律的なる自他の全人的一體を人間存在の内與より自ら形成する。愛に於いて自他は個的自律主體たると同時に、相互融即して各々他の内面を分取するのであり、相手の全人間性を自己の責任ある關心の内容とする事が、何等の不自然さもなく又相手の人格を侵害する事なく自ら遂行されるのである。要するに全人的愛は自律と一體といふ外觀的矛盾を解消して内面的に融一せしめるのである。かゝる全人愛を樞軸として形成される融即的共同體こそ、嚮に所謂

處と位とを與へる主體的地盤である。そこに於いては他者の轉換向上を要求する事が必ずしも直ちに他者人格の自律性を侵害する事にならぬ。却つてそれは他者人格の相對的自律を絕對的自律に高め、他者を現實隨順的建設主體としての眞實なる人間に高める事に外ならない。他者も又かゝる自己の要求を卒直に認め當然の事としてこれに従ふのである。

然しこの共同體的愛の地盤は、主體的內面的にのみ生きられ隨順的にのみ建設されるものであつて、若し各人が相對的自我主張の客體的對象に轉ずる時、却つて不幸なる全的相對對立を現出する高度の可能性を持つ、現實の最も悲痛なる矛盾相剋は、正しくかゝる共同體的愛の破綻に於いて體驗されるのである。最も深く全人的に結び付けるものなるが故に、最も激しき相剋をうむのである。共同體の融即人倫に對立する各人の個性がその生命意欲を無制約的に主張貫徹せんとすればする程、全人的相剋は深まり人間愛は破綻し、一體より疎外さるゝ自己は遂に悲痛なる自己疎外の深淵に没落する。然し愛は一體への止み難き衝動であり、絕對疎外をも猶且媒介せずんば止まぬ絕對媒介の意志である。絕對疎外に破滅する自己を攝取するは正しくこの絕對の愛であり、隨順を悲願する新生の自己はこの絕對愛に生きん事を切願する。而も絕對隨順に自己を決斷せしめるのも正しくこの絕對愛である。これを絕對媒介の意志といふ所以である。假令如何程愛の破滅に苦惱絶望すとも、融即的共同體に生きた全人的愛の美しき想出が、轉換に於いて絶對愛の媒介に自己を委ねしめるのであり、然も愛は自己をしてこの轉換を眞實なる自己への復歸として實感せしめ、愛の喪失を文字通り自己疎外として痛感せしめるのである。然し一度自他の對立に分裂せる苦惱絶望の中から現成する絶對の愛は、最早單なる共同體的人間愛である事が出來ぬ。それは疎外的對立の悲哀絶望を超越せんとする

戦ふ愛であり、而もこの超克は又愛の戦として戦はれるのである。戦ふ愛の媒介によつてのみ疎外的自己は、絶對現實を隨順的に建設せんとする眞實の自己に復歸し、愛の戦を通じてのみ現實は、絶對現實として隨順的に建設されるのである。愛の戦は疎外的對立の狀況に從つて平和的乃至戰闘的な様々の形態に於いて戦はれ、戦ふ愛は各人の個性の性格に應じて種々の色合を以て現成するであらう。ともあれ愛の戦を通じて分裂せる愛はより高き愛に具體化してより深き人格的一體を實現せんとし、各人は戦ふ愛によつて相互否定的に絶對轉換新生向上するのであり、絶對愛を通じて各人の自律性を認めつゝ相互の絶對協同は實現されこゝに絶對現實の隨順的建設は遂行せんとする。而もこの絶對愛の協同は、主體性の内奥に於いては、他者が即自己にして自己が即他者なる人格的一體の最も實存的具體的なる人倫的自覺である。更に絶對現實の隨順的建設は、他者生命の人格的歴史の伸長發展進歩向上を、直ちに自己自身の發展向上として喜ぶ人倫的絶對協同の歴史の遂行に外ならぬ。絶對愛の協同と絶對現實の隨順的建設とは絶對相即の聯關をなすのであり、この絶對相即に於いて具體的人倫と歴史的生命とは媒介的相即を實現するのである。各人がこの人倫的自覺を實存的根源より嚴肅に痛感し、この絶對協同の歴史的实践に誠實以て獻身する時、その絶對相即は主體的に生きられ、人倫即生命の絶對現實は生成即建設され建設即生成するのである。この絶對相即の生に於いては、最早自我の一方的生命意欲を以て人倫を破る事はなく、却つて生命意欲の精神的熾烈に衝動される愛の戦の誠實の中に絶對人倫が實現されるのである。又この絶對相即の生に於いては、客體的人倫の保守に自己生命を犠牲にする事はなく、却つて戦ふ愛の人格的眞實の中に生命の精神的内實が實現されるのである。客體的人倫は人間の生命の人格的主體性によつて精神化されて新たなる精神的生命を得、直接的生命意欲は倫理的實踐の人格的主體性によつて精

神化され眞實なる人倫性を以て實現され、以て人倫と生命とは相互の否定的媒介に於いて絶對現實の隨順的建設に參與するのである。

眞摯なる愛の戦が戦はれ誠實なる戦ふ愛が生きられる主體的地盤は先づ以て共同體である。然しそれは必ずしも共同體が我々の最も具體的なる現實たる事を意味するのではなく、それは寧ろ共同體の我々に對する身近さに由來するのである。然し自己が生きる最も具體的なる現實は云ふ迄もなく國家的現實である。現實への隨順は究極的には否最も端的に國家現實への隨順でなければならぬ。國家こそ自己を全的に攝取する絶對現實であり、自己は根源的に國家の生命基礎と結び付き、精神的に國家の歴史的文化的傳統の中に生き、國家への隨順に於いて絶對人格性を與へられるのである。國家への隨順こそ現實に生きる自己に對する至上絶對の命令であり、國家の隨順的建設に於いて自己は絶對性を實現するであらう。特殊なる共同體への隨順も、眞實には國家への隨順の相の下に、その一面として反省自覺實踐されねばならぬ。國家的現實は、考へ得可き最深大の絶對自己否定的隨順を至上命令し、この至上命令の前には、最早封鎖的共同體への絶對愛は克服されて、國家の絶對愛に揚棄されねばならぬ。血縁愛・性愛・友人愛ではなくて絶對的國家愛こそ至上の絶對愛であり、この愛を全的に生きてこそ自己は眞實の實存たり得るのである。實存は國家愛を體現する國家實存に於いて最高の眞實を實現する。私は國家の至上命法に對しはさむ可き何等の疑念を持つ事が出来ぬ。國家の絶對愛を全心全靈擧して生き絶對自己否定的に國家の隨順的建設に獻身せんとするの悲願を懐くのみである。然しともすれば自愛的自我主張の迷盲にこの嚴肅の悲願挫けんとするを悲み歎かざるを得ぬ。この我執不忠の身、絶對的國家愛を語り國家現實の建設を論ずるは、許されざる不當であらう。自ら私もこの不當なるを悲痛に

も自覺し我執不忠の罪淺からざるを痛感する。然し名も無き一人の民として國家への隨順に生き、絶對現實たる國家を彌々絶對の現實として建設せんとの悲願を益々固め、分に應じ位に従ひ處に據つて國家隨順的建設に献身せんとの希望を強む可きを至上の命法として自覺する。而してこの固き悲願を懷きこの強き希望を以て國民教育の實踐に献身せんと私はひそかに覺悟して居る。今は猶その處を得ざるが故に、哲學的思索の內的行爲を遂行して以て、この悲願を實存的に深め哲學的に自覺して、この希望を實現し得る眞實の臣民となり、國家隨順的建設の哲學を自己自身として主體化し、この哲學を提げて臣民の道の實踐に献身したく思ふのみである。

體驗の未熟自覺の不全の故に、遂に國民教育の哲學的體系思索を完遂し得ざるは遺憾の極みであるが、今はこの完遂を後日に期して餘りにも長き稚拙の論考を終らねばならぬ。(畢)

(後記)

「教育實踐の哲學的自覺」が上來の論考に續かねばならぬ。然し教育實踐は、教育的現實の絶對完成なるが故に、又これの絶對否定たる意味を持つ。従つて教育實踐の哲學は、教育的現實の哲學と、連續即非連續の關係を持つが故に、教育哲學體系の見地より見て、更めて論考するのが妥當であると思ふ。而してこの第五節は兩體系部門の恰も轉換點たる位置を占める。